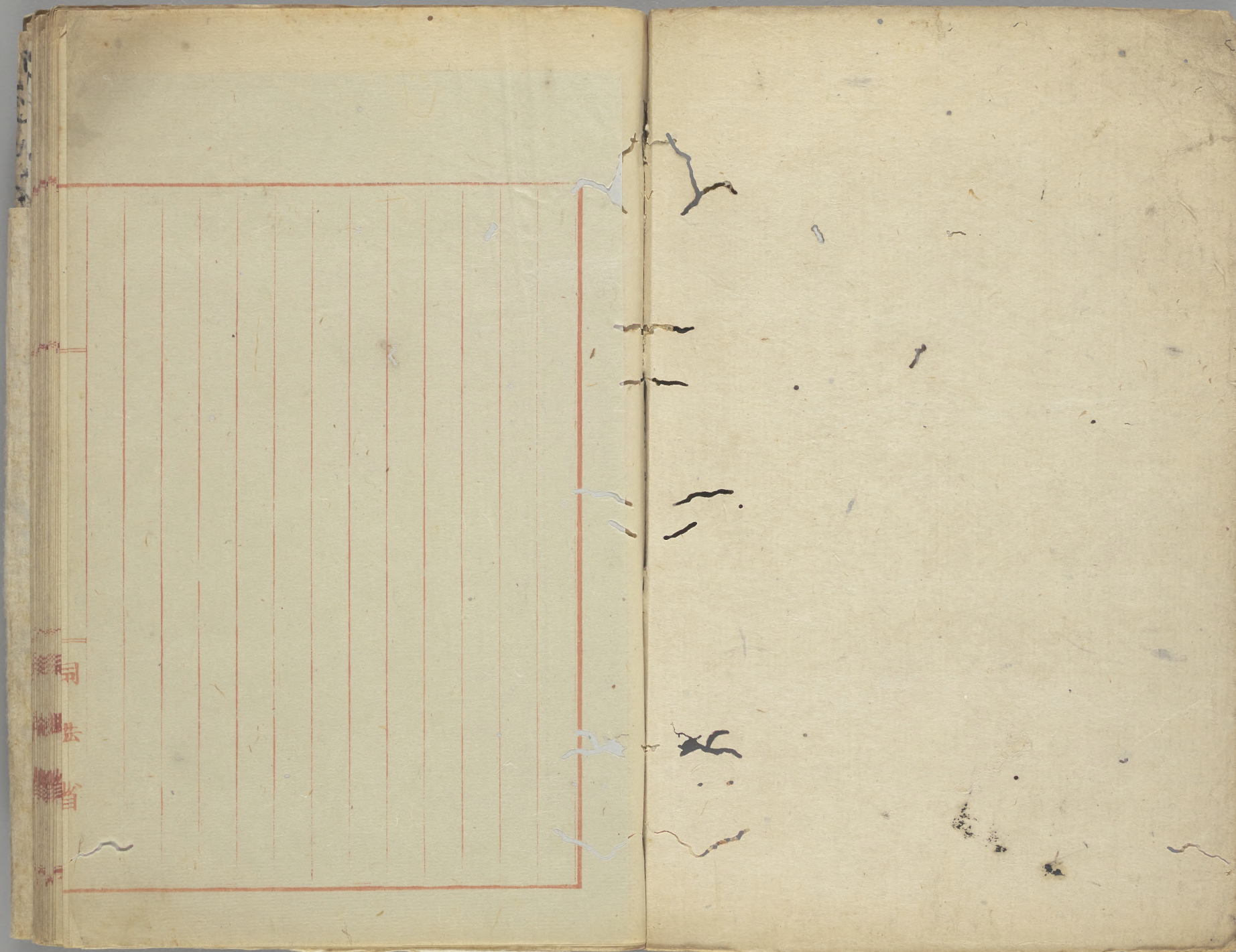
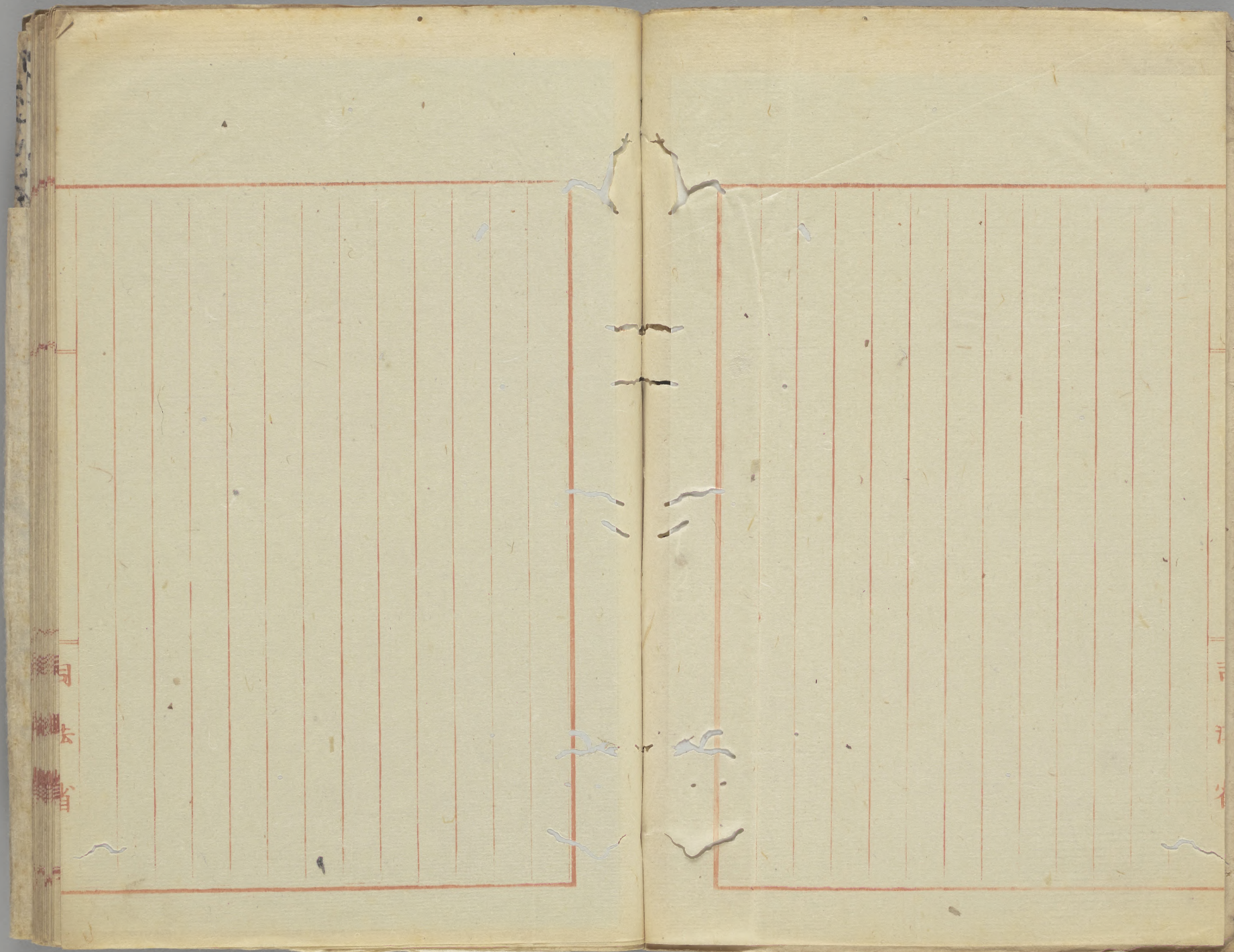
明治十六年七月

法學卒業生徒證書授與式取扱書類

司法省第七局
寄宿生徒係

十六年九月ヨリ十七年六月ニ至ル

満点二百三十八　十分ノ八、百九十四ト四、十分ノ六、百四十二ト八、十分ノ四、九十五ト二

卒業生徒点数并階級表

第一等　二人

点数	氏名
二百点	河村譲三郎
百七十二点（但シ病氣ニ因リ大試験ヲ欠キタレヒ昨年九月来ノ平均点数二百〇三余ニ当ル故ニ第一等ニ加フ）	梅謙次郎

第二等　二十人

以上平均点数十分ノ八以上ヲ得タル者

点数	氏名
百八十七点半	秋月左都夫
百八十五点	櫻井一久
百八十点半	鶴文一郎
百七十五点半	冨谷鉎太郎
百七十三点	杉山三保松
百七十三点	鶴見守義

点数	氏名
百七十一点半	田部 芳
百六十九点半	河村 善益
百六十九点半	寺尾 亨
百六十三点半	飯田 宏作
百六十一点半	前田 孝階
百五十九点半	栗原 幹
百五十八点半	米村 壯宜
百五十四点半	志方 鍜
百五十四点半	松室 致
百五十二点半	小笠原 貞信
百五十一点半	小野 衛門太
百五十一点	手塚 太郎
百五十点半	清水 一郎
百四十三点	樹下 重次郎

以上平均点数十分ノ六以上ヲ得タル者

第三等 十一人

点数	氏名
百三十八点	古賀 廉造
百三十七点	池田 轀知
百二十九点半	春日 慶之進
百二十七点	水工 長次郎
百二十点	山崎 恵純
百十九点	渡邊 暢
百十四点半	平嶋 及平
百十三点半	石地 宅憲
百十三点	小川 鉄吉
百十二点	河野 彦治

百十一点　末弘嚴石

以上平均点数十分ノ四以上ヲ得タル者

第四等

九十五点　池部淳

仝　森田資之

九十二点　石塚積次郎

八十三点半　坂部訓正

以上平均点数十分ノ四ニ至ラサル者

総計三十七名

肺病ニテ凡一年間欠課ニ付卒業ニ至ラサル者　吉原三郎

来ル十日卒業式挙行候ニ付午前九時ヨリ出校可有之候事

但羽織袴又ハブロックコート及ヒ靴ノ着用ノ事

明治十七年七月四日　第七局

河村譲三郎殿

外三拾六名宛

追テ当日ハ保證人及ヒ親族ニテ内弐名来観ヲ許ス

卒業試之節司法省法律辞ヲ述
候者之生徒答辞取調之為メ来ル九日
午前八時出頭可有之候事

司法省
第七局

明治十七年七月七日

郵便発送付〔朱書〕

河村譲三郎殿

宮崎
櫻井一久殿

鶴丈一郎殿

明治十七年七月三日

揭示掛

豫科生

來ル十日午前十時ヨリ本省通学教場ニ
於テ本科生卒業証書授与式挙行
候ニ付来観ニ可致事

富井講師殿

杉山三保吉殿

豫科生ニ而之者ハ掲示案ノ通御沙汰ニ至急回答

来ル十日午前十時本省通正面ニ於テ掲
於テ本科生六年卒業証書授与式挙行
候ニ付此段及御通知候事

明治十七年七月四日

芳七局

各通

横山兎之丞殿
津田蔵彦殿
桂村寿八殿
石尾一郎殿
松倉松吉郎殿
原謙一殿
華房甲子太郎殿

市川得一卯之
野田藤吉卯之

當省ニ於テ来ル十日午前第十時法学生徒卒業證書授與式執行候ニ付當日御来駕被下度此段申進候也

明治十七年七月四日

山田司法卿

司法卿補

大木文部卿殿
田中[illegible]殿
細川元老院幹事殿
河瀬[illegible]殿
鶴田浩殿

前同文学部白御貴来其之件

月　日　卿

勅任判事七等
玉乃大審院長殿
外五名

外陸之名紀有之

司法省

前同文此段申進候也

明治十七年七月四日　山田司法卿

各学校長、

学習院長　谷干城殿

陸軍士官学校長　御中

陸軍戸山学校長　堀江芳助殿

陸軍大学校長　御中

司法省

海軍兵学校長 御中

当省ニ於テ来ル十日午前第十時法学
生徒卒業證書授與式執行
当日貴員臨席有之候

明治十七年七月九日

司法権少書記官加太邦憲

文学校長

東京大学総理

加藤弘之殿

右通

外七名

外七名 名記省之

当省ニ於テ来ル十日午前第十時法
学生徒卒業證書授與式執行
ニ付当日御出席有之候様致度此段申入候
也

追テ正午十二時立食之事

明治十七年七月九日

第七局副長

加太邦憲

安藤則命殿

高木秀臣殿

南部甕男殿

大塲盛義殿

追而本書ハ明後日御下付ノ上早々
御返却有之度候也

当省ニ於テ来ル十日午前第十時法
学生徒卒業證書授与式執行候ニ付
当日御出席有之度此段申入候也

明治十七年七月四日

第七局副長
加太邦憲

一瀬勇三郎殿
澤村華殿
柳田直平殿
藤林忠良殿
~~田中来平殿~~

司法省

至口

熊井眉太郎殿
中村徳三殿
高橋太郎殿
花田貞正殿
町田章備殿
北島業壽殿
志賀君一殿
熊野敏三殿
吉田平三郎殿
吉川午三郎殿
安積重泰殿
近山相之殿
石井芳蔵殿

下村義治殿
勘解由小路資承殿
牧野淑人殿　　矢野良隆
室田季備殿
隆田仁和殿
福原直道殿
大島三四郎殿
古木敬三殿
中村行殿

以上不同　因高然

断

主 陸軍大学校長 [illegible]

合戸山学校長 陸軍少将 堀江芳助

海軍兵学校長 海軍中将 伊東海軍中将

一 五名

安藤則命

高木秀臣

不在 名村泰蔵

南部甕男

大塚盛巍

杉山孝敏

磯部四郎

人見恒民

栗塚省吾

小林謌

冨田禎次郎

近藤鎮三

福原恭輔

植村長

高見保益

横田國臣

加太邦憲

蒲原忠蔵

一 総八名

大審院長 玉乃世履

検 勅任幹事長 渡辺驥

司法省

控訴裁判所長　西成度
勅　大審院判事　尾崎忠治
仝　仝　岡田重俊
仝　仝　坂本政均
東京始審裁判所長　池田彌一
仝　裁審所検事　野崎啓造
仝　控訴裁判所検事長　加納謙

一　九名

外國人　ボロソナート
アッペール
アリヴェー
フーク
ビゴー

一　五名

東京大学総理　加藤弘之
仝　幹事　服部一三
専門学務局長　濱尾新
普通学務局長　辻新次
東京師範学校長　高嶺秀夫
工部大学校副長　長久　竹田春風
東京大学豫備門長　杉浦重剛
東京外國語学校長　内村良藏

一　八名

旧卒業生

断　不在

宮城浩藏
岸本辰雄
木下哲三郎
小倉久
岩野新平
高木豊三
井田鐘次郎
井上操
矢代操
木下廣次
亀山貞義
橋本胖三郎
内藤直亮

断

二十五名

杉村虎一
大塚成吉

卒業生

河村譲三郎
梅謙次郎
秋月左都夫
櫻井一久
鶴丈一郎
冨谷鉎太郎
杉山三保松
鶴見守義

田部　芳
河村善益
寺尾　亨
飯田宏作
前田孝階
粟原　幹
木村壮亘
志方　鍛
松室　致
小笠原貞信
小野衛門太
手塚太郎
清水一郎
桝下重次郎
古賀廉造
池田輝知
春日慶之進
水上長次郎
渡邉　暢
平萬乃平
百地宅窓
小川鉄吉
河野彦治
末弘嚴石
池部　淳
森田資之

石塚積次郎
坂部訓正
一　三ノ様七名

牧野成行
室田充美
福原直道
大鳥三四郎
立木頼三
塩田仁松
中村行
○矢野良臣
二　八名

○津村董
○柳田直平
○一ノ瀬勇三郎
一　様名
一　三名
局員
坂田䒹
藤林忠良
中村健三
熊本庸次郎
関口永益
高橋太郎
藏田貞正
町田重備

熊野敏三
北畠常泰
志賀貫一
吉田平三郎
安積重恭
近山安貞
石井芳萬
下村義治
勘解由小路資羕
井上正一

一 拾八名
　〔朱書不明〕

○倉富勇三郎

○川目亨一
○高野眞遜
○鄭永寧
十四名

○吉井立吉
○川村高章
○鎌原宏
○糸山元次郎
○小出有秀
一 五名

合計百四十壱名　内十三人〔朱〕
〔朱〕上百二十八名

諸科生ハ本校ノ卒業生之候

吉原三郎

横田秀雄
古田鈕藏
千葉亀四郎
市川勝之助
草鹿甲子太郎
城数馬
原誠一
太田峯三郎
神山亨太郎
石川鐙三郎
野田藤吉郎
板倉松太郎
田代律雄

西久保弘道
津田藤麿
木下友三郎
柿原武熊
吉田保五郎
藤田重守
石川錦一郎
河地金代
上條愼藏
齊藤浩躬
應當衡
石尾一郎助
堀三友

板垣不二男
植村彦八
塚原簡三郎
宮川太郎
遠藤敬一
福井清石
遠藤忠次
伊藤千賀太郎
小橋豹吉
川田正根
横山免與三
瀧田四郎
益嶌英三郎

一 四拾貳名

中嶌靜甫
両角彦六

卿補欠送迎　津村董
同　柳田直平
同河原　直山安貞
同〃　下部義治
教務主任　一瀬勇三郎
同　町田重備
雜務總引請　藤林忠良
同手傳　吉田平三郎
同〃　吉川午三郎
同〃　野口義藏
同〃　勢群田蔵資承

次、副局長、告終式、禮如初
次、御帷出場、禮如入場
次入宴堂、中分、就東西案
次退出
陪臨傍観人儀、略準右、諸演説間、随意拍掌
唱賛、且豫科生、毎成業生受證、齊拍掌

卒業式順序

午前十時臨場

第一 学校創立以来ノ報告 局長
第二 証書御授与 司法卿
第三 祝辞 御雇入
第四 答辞 生徒総代
第五 演説 アッペール
第六 同 アリヴェー

以上

司法卿祝詞

法學寄宿生多年勤學ノ勞ヲ積ミ其業ヲ了リタルヲ以テ此ニ成業證書授與ノ典ヲ挙ク我司法省夙ニ學校ヲ興シ生徒ヲ養ヒ佛蘭西又ハ邦語ヲ以テ法律學ヲ教授シ既ニ成業シタル者少ナカラスト雖氏佛蘭西語學ニ起業シ豫科及ヒ本科併セテ八ヶ年ノ學程ヲ完フシテ其業ヲ大成シタルハ實ニ諸子ヲ以テ初メトス豈賀セサル可ケンヤ今ヤ諸子司法事務ニ諳ルニ充分ナル資料ヲ養ヒ學力ヲ實際ニ活用シ以テ帝國ノ司法上ニ光榮ヲ與ヘヨ懋ヨヤ諸子

生徒答詞

生徒總代河村讓三郎左之答詞ヲ伸

生等司法卿閣下及ヒ局長幹事各位カ、懇切ナル保庇ト、教師教官諸君ノ丁寧ナル教育トニ依リ、幾カニ業ヲ卒フルヿヲ得今日此ノ盛典ヲ設ケラレ、閣下親ラ卒業證書ヲ授與シ、又祝詞ヲ賜フ、生等何ノ恩カ之レニ若ン何ノ榮カ之ニ若ヒ夫レ法律ノ學ハ、容易ノ學ニ非ス、司法ノ務ハ、容易ノ務ニ非ス、生等不敏特ニ恐ル、彼ノ懇切ナル保庇ト、叮嚀ナル教育トニ、副フヿ能ハサルヲ、然リト雖モ、生等今ヨリ以往、拮据勉勵鴻恩万分ノ一ニ報セントス、謹テ答詞ヲ奉ル

卿祝詞ノ稿　前稿ニ代ヘ此ヲ用ヰス

吁法律学成業ノ諸子吾本日諸子ノ為メニ陳述スル祝意ヲ聞ケ本省夙ニ学校ヲ興シ邦語及ヒ西語ヲ以テ法律学ヲ修得タル者既ニ少シトセス但佛蘭西語学ニ起業シ豫科本科ノ順序ヲ八ケ年ノ課業ニ完了セシハ抑諸子ヲ以テ初メトス是本日諸子カ成業保證ノ典ヲ挙ル所以ナリ然ルニ當校ノ生徒ヲ教育スルヤ唯ニ空談徒講ノ学者ヲ天下ニ多カラシメンカ為ニアラス各其学カノ長短大小ニ随ヒ之ヲ内外ノ実事ニ施サシメ吾帝國法律ノ益完全ナランヲ庶幾スル所以ナリ諸子今ヨリ吾任スル所ニ適

司法省

勉スル前八年一日ノ如クナラハ則チ諸子
ニ於式スル所ノ後進年ヲ逐フテ群ヲ成シ
遂ニ本省ノ目的ヲ達セシメン此時ニ方テ
口奚ソ吾一人之ヲ祝セヒコト欲スルモ得可ケ
ン乎其初ヲ今クセスシテ能ク其終ヲ保ツ
者未タ之レ有サルナリ諸子亦之ヲ記セ

官報ヘ登記ノ分

生徒卒業式順序

午前十時臨場

第一 学校創立以来ノ景況報告 加太副局長

第二 證書授與 司法卿

第三 祝辭 仝

第四 答辭 生徒總代

第五 演説 教師アッペール

以上

卒業生徒人名

島根縣士族 榤謙次郎

滋賀縣士族 河村譲三郎

宮崎縣士族 秋月左都夫

石川縣士族　櫻井一久
佐賀縣士族　鶴丈一郎
東京府士族　手塚太郎
栃木縣士族　富谷鉎太郎
石川縣士族　前田孝階
山口縣士族　杉山三保松
滋賀縣士族　田部芳
栃木縣士族　鶴見守義
石川縣士族　河村善益
福岡縣士族　寺尾亨
宮城縣士族　飯田宏作
山形縣士族　粟原幹
福井縣士族　米村壯宣

埼玉縣士族　志方鍛
福岡縣士族　松室致
神奈川縣士族　小野衛門太
石川縣士族　清水一郎
佐賀縣士族　樹下重次郎
佐賀縣士族　古賀廉造
東京府華族　池田輝知
宮城縣平民　春日慶之進
滋賀縣士族　水上長次郎
廣島縣平民　山崎恵純
千葉縣士族　渡邉暢
熊本縣平民　平嶋及平
東京府士族　百地宅憲

千葉縣士族　小川鉄吉
東京府士族　河野彦治
大分縣士族　末弘嚴石

以上法律學士ノ稱號ヲ授與ス

石川縣士族　池部淳
愛知縣士族　森田資之
千葉縣平民　石塚積次郎
茨城縣士族　坂部訓正

以上卒業證状ヲ付與ス

右卒業及學位授與證書ハ左ノ如シ

證

屬籍身分
氏名

本省法學校ニ於テ法律學ヲ修メ考試ヲ完了シテ正ニ其全科ヲ成業セリ仍テ之ヲ證シ且法律學士ノ稱號ヲ授與ス

年月日　司法省

卒業證書冩

證

屬籍身分
氏名

本省法学校ニ於テ法律學ヲ修メ考試ヲ完了シテ正ニ其全科ヲ成業セリ仍テ之ヲ證状ヲ附與ス

年月日　司法省

貴省ニ於テ来ル十日午前十時法学
生徒卒業證書授與式御執行有之候ニ付
校長出省可致旨御達之趣承知仕候然ルニ
当校之校長ハ不在ニ付幹事ヲ以テ諸事代理致
候事ニ付幹事ノ出頭可仕此段及回答
候也

明治十七年七月九日
陸軍大学校幹事

山田司法卿殿

田中

本月十日法学生徒卒業證書授與式ヲ執リ候際シ参場可致旨佳招ヲ辱シ候處生憎該日ハ前約有之参場ヲ難得遺憾之至ニ存候

拝答

七月六日　田中不二麿

山田司法卿殿

十七年七月四日
兵學校長
伊東海軍中将
山田司法卿殿

昨十一月廿七日附
大喪儀之節出京挨拶之
為御機嫌伺御参内
可有之旨御触有之趣
承知候然ル處御病気ニ付
難被出候旨御届書
被差出候ニ付其旨
相達候様申来候ニ付
協議候処無差支旨申来候此段及
御通知候也

十二年七月四日

兵学校長
伊東海軍少将

山田司法卿殿

来ル十日午前十時より
当省ニ於テ法学生徒
卒業証書授与式
相執行候ニ付同日ハ来省
之義相招待ヲ蒙リ奉
多謝候右ハ来省可仕
候処此節差合有之
御断候也

明治十七年七月八日
学習院長
谷干城

山田司法卿殿

明治十七年七月

東京大

司法権書

来ル十日午前第十時
貴省之生徒卒業証
授与式執行ニ付本
官ニも臨場可致様
以御招ニ預リ辱承知
謹而其御請申述候也
七月十一日
[illegible]殿
河野敏鎌
山田顕義殿

来ル十日午前十時法学
生徒卒業證書授与式
被執行候ニ付参庁可致旨
御案内之趣致承知候処ニ
大坂府下ヘ出張ニ
付来ル七日発程いたし
候ニ付参会致兼候旨
此段及御断候也

明治十七年七月五日

東京大学総理 加藤弘之

司法権少書記官 加太邦憲殿

十日午前第十時
法學生徒卒業
證書授與式
擧行ニ付臨席
可致旨兼テ當日
右趣ニ付此段申進
及貴答候也

明治十七年七月七日
辻新次

司法權少書記官
加太邦憲殿

来ル十日午前十時
司法省法学生徒
卒業証書授与
式ヲ施行ス自集席
可被否承了該日時
集趣可被ス此段佐益
仕ル 敬具

明治十七年七月八日
東京大学幹事服部一三

司法権少書記官加太邦憲殿

Tokio le 7 Juillet 1884,

Cher Monsieur,

C'est avec un vif regret que je vous informe qu'il me sera impossible d'assister à la distribution des diplômes aux élèves de l'Ecole de droit, cérémonie à laquelle j'aurais assisté avec grand plaisir.

J'ai appris ce matin seulement que le même jour et à la même heure devait avoir lieu la distribution des certificats d'études aux élèves du Gogakko à laquelle je suis obligé d'être présent.

Recevez avec mes remerciements, l'assurance de mes meilleurs sentiments

Jacques

来ル十日貴省法學生徒卒業證書授與
式挙行相成候ニ付テハ参列可致之處頃
日眼病ニテ療養致居候ニ付名代差遣候條右
段ハ書面ヲ以貴答候也

明治十七年七月七日

東京師範學校長高嶺秀夫

司法権少書記官加太邦憲殿

本省ニ於テ来ル二十日午前第十時法学生徒
卒業証書授与式挙行候ニ付御来臨
被成下度此段御案内旁申進候也

明治十七年七月十八日

東京控訴裁判所長
西成度

加太司法少書記官殿

本校明十日法学生
撫卒業証書授与
式相行候ニ付貴官ニ
午前第十時御臨
ニ付右臨席招状差
出置候然ル處貴官ニ
御所轄ニ重キ公務
有之候而御自然
御参列出来兼可申
計ト存候難
席ニ付以テ自然ニ於
其旨了解有之度
此段ニ付御申入
下度候此段御願申
上候也ニ付申上候
敬白

十月十日　川目直一

加藤書記官殿

謹書授　供式被為行候ニ付
席未タ済ス一キ旨被仰下
雖有難存候、百事操合
以テ出頭可仕之処、彼ノ重
罪深謹ニ被妨愚意ヲ不
能果実ニ遺憾不尠奉
存候、右止ヲ得サル事訳御
悃察被遊不悪ノ非礼
御海恕被下度候、不日上
京拝眉ノ上尚委曲可申
上候　草々頓首再拝

七月九日

大塚成吉

松本学兄
函丈下

教師アッペール演説譯

余ノ親友ヨ数日以前余カ諸君ニ簡單ナル訣別ノ演説ヲ為シタル片ハ實ニ最終ノ思ヲナシタリ蓋シ諸君モ亦同感ナリシナラン而ルニ即日校長余ニ報スルニ学位授与ノ典ヲ挙行セラルヿヲ以テシ且式場ニ於テ一席ノ演説ヲ為スヘキヿヲ命セラル余ニ於テ意外ノ幸栄ト之ハサルヲ得ス

余ハ最後ノ教師タリ且他ノ教師諸氏ハ本日避ケ難キ事故ニ因リ出場セサルヲ以テ諸氏ニ代リ諸君ノ卒業ヲ祝シ及ヒ諸氏カ將来諸君ニ希望スル所ノ事ヲ吐露スルノ榮ニ當レリ余モ亦此機會ヲ幸ヒトシ尚諸君ニ呈スルニ數言ノ説諭ヲ以テセントス乞フ暫ク忍テ之ヲ聽ケ

余ハ先ツ諸君ノ教師タル貴重ノ任ヲ附與セラレタル大

木公閣下及ヒ余ヲシテ其任ヲ継續セシメラレタル田中
公山田公両閣下ノ鴻恩ヲ拝謝セサルヘカラス諸公カ諸
君ノ學術進歩ヲ熱望セラル、ノ甚キ殊ニ現任司法卿閣
下カ本日其赫々タル證標ヲ示サレタルカ如キ大ニ余ノ
勉強ヲ奨励シタリ又タ博学ナル同僚諸氏乃チ余ト同時
或ハ余ニ先チテ諸君ノ教育ニ従事シタル日本及ヒ佛蘭
西ノ教師諸氏ニ對シテ一言ノ謝辞ナカルヘカラス特ニ
余ハ諸君ノ為ニ晩年ヲ犠牲ニシタル「ドクトール」ムリエ
氏ノ記念ニ向テ敬禮ヲ盡サヽルヲ得ス氏ハ學識ノ博洽
ナルト精神ノ不覊活溌ナルトヲ以テ能ク諸君ノ智力ヲ
發達セシメ後日教科ニ入ルノ階梯ヲ完成セシメタリ其
功労ノ大ヒナル感謝スルニ餘リアリ又学校官員諸君カ
平生懇切ニシテ余ヲ補助セラレ及ヒ困難ノ職務ニ在テ
巧ニ規律ヲ維持セラレタルハ余ノ諸君ト共ニ深ク謝ス
ル所ナリ

是ヨリ諸君ノ上ニ付述ヘントス諸君ハ諸君カ公務ニ必
要ナル知識ヲ具備スルヲ公證スル所ノ學位ヲ収受セリ
是レ偏ヘニ諸君カ夙夜學事ニ勉強セシ功労ノ効ス所ナ
リ凡ソ師ノ学生ニ於ケルヤ勉強ヲ勸ルヲ以テ常トス余
ノ諸君ニ於ケルヤ却テ勉強ノ過劇ナルヲ戒メタリ諸君
カ平生修学ニ努力セシハ推シテ知ル可シ余ハ本日公衆
ノ前ニ於テ之ヲ歎賞セサルヲ得ス

然リト雖𪜈此学位ハ未タ世人ニ對シ余諸君及ヒ其他既
ニ諸君ヲ知リタル者カ置ク所ノ信用ヲ得ス何トナレハ
世人未タ此学位ハ如何ナル学カト如何ナル知識トヲ代
表スル者ナルヤヲ知ラサルヲ以テ教師及ヒ校長カ為シ

タル確認真證ハ諸君ヲ保庇スルニ出タルモノナランコト
疑フ者アルアルヲ免レサレハナリ諸君カ得タル栄稱ノ
品位ヲ定ムル者ハ諸君ナリ之ヲ世人ニ示ス者モ亦諸君
ナリ將来法学校ニ於テ成業スル者ハ人皆之ヲ諸君ニ比
スヘク又其受クル所ノ学位ハ諸君カ與フル所ノ品位ヲ
有ツ可シ

諸君ハ諸君中ノ二三子カ学位ヲ受ル能ハサリシ所以ヲ
覺知セシナラン余モ亦心ニ不快ヲ感セサルニ非ラス然
𪜈学位ヲ濫與スル𪜊ハ其品位ヲ落シ當校ノ名誉ヲ害ス
ルヲ奈何セン

右ノ二三子ハ学位ヲ得スト雖𪜈修業ノ完全ナルヲ證明
シタル卒業證書ヲ受得セリ此證書亦自ラ貴重ス可キ品
位ノ在ルアリ今日諸君カ斯ノ如ク少數ニ減シタルハ校

則ニ因リ屢次勉強ノ足ラサル者ト身体ノ壮健ナラサル
者トヲ除却セシニ因ルニアラスヤ又法学校ニ於テ諸君
ヲ入学セシメタルヤ身体ノ最モ強壮ニシテ最モ忍耐力
ニ富ミ且ツ尤モ識力アル者ヲ撰抜シタルニアラスヤ余
ハ公衆カ此事ヲ熟知センヿヲ希望ス之ヲ要スルニ諸君
ハ学位ノ有無ニ拘ラス司法者法学校生徒ノ名義ノミヲ
ヲ以テ已ニ甚タ貴重ナル得業證状ヲ得タル者ト云フテ可
ナリ　證

余ハ卒業諸書ノミヲ得タル諸君カ落膽セサルヿヲ希望
ス此諸君ト雖𪜈猶ソノ勉強ニ因テ其已テニ得タル所ノ
知識ヲ完全ナラシムルヿヲ得ヘシ

諸君ハ学位ヲ得タルト否ラサルトヲ論セス皆將ニ職ヲ
裁判所及ヒ行政官衙ニ奉スルナラン且ツ余カ報告ニシ

テ其當ヲ得ハ余カ同國人ニシテ高名ナルボアソナード君カ
傳譯員トナリ將來日本帝國ノ法律トナルヘキ民法原理
ノ講義ヲ聽クル者アラン

然リ而シテ諸君カ奉スル所ノ職ニ關シ其當ニ盡スヘキ
ノ本務如何ニ至リテハ余カ得テ指教ス可キ所ニ非ラス
先進ノ士アリ其威權ト其ノ曾テ經歷シタル所ノ實驗ト
ヲ以テ諸君ノ爲ニ缺クヘカラサル注意ヲ爲シ又善ク實
例ヲ舉テ諸君ヲ諭ユルアラン諸君ハ其傍ニ在リテ與ニ
事ヲ行フニ方テハ則チ黌中ノ學問ハ未タ實際ニ當ルニ
充分ナリトスルニ足ラス世ノ明判官タリ若クハ善良ナル
行政官トナランコト欲セハ尚ホ細密精確ナル判斷力ト性
命ヲ擲チ以テ公事ニ供スルノ赤心トヲ要スルノ眞理ヲ
覺知スルナル可シ然リト雖モ彼ノ實際ノ業務ニ關シ諸
君ヲ訓諭スル者ハ一世ノ良師ナル經驗ト上官其人ノ在
ルアリ復タ余カ言ヲ俟タサルナリ故ニ余ハ他ノ點ニ付
キ聊カ諸君ノ注意ヲ喚起セントス欲スルナリ

凡ソ人自ラ處ル所ノ事ヲ以テ緊要的視スル其實ニ過リ
ルハ薄弱ナル人性ノ免レサル所ナリ而レ氏爲ニ高上ナ
ル思想ヲ養生シ又ハ大事業ヲ實行セントスルノ希望ヲ
奨勵スルニ於テハ可ナリ兎ニ角諸君カ今日處ル所ノ地
位ト其將ニ從事ス可キ務ニ至ツテハ寔ニ非常ノモノト
見ナサヽルヲ得サルナリ

夫レ貴國カ翻然舊慣ヲ脫シ創メテ歐洲ノ文明ト駢馳セ
ントスル方向ヲ定メテヨリ僅ニ十有七年大勢一変其進
歩ノ迅速ナル識者ノ驚ク所ニシテ或ハ爲ニ竊ニ之ヲ憂
フル者アルニ至ルト云フモ敢テ過言ニ非ルナリ而シテ

其変遷ノ状体ト結果ノ如何ヲ辯拆スルニ至リテハ世自ラ其人アリ余ク喋々ヲ須スト雖モ世運ノ変遷ハ目下吾人ノ實スル所ニシテ復タ却歩スルヲ得サルト何レノ場合ヲ論セス既成（アッコンプリー）ノ勢ニ據リ事ヲ處スルノ得テ免レサルトハ余ノ断シテ疑ハサル所ナリ故ニ余ハ此変遷ニ際會スル諸君カ本務ノ如何ヲ論セントス

諸君ヨ諸君ハ世ノ壮年子弟カ有セサル所ノ二個ノ便益ヲ特有セリ

諸君ノ学科ハ法律及ヒ経済ハ全科ニ渉レリ加之ス諸君ハ皆ナ善ク佛蘭西ニ通スルヲ以テ常ニ判決録及ヒ其他ノ諸書ニ渉猟スルヲ得可シ諸君カ特有スル二ノ益トハ即チ是ナリ夫レ富貴ナレハ必ラス富貴ノ責任アリ特権アレハ必ラス之ニ對スルノ義務アリ諸君ハ各其知識ヲ研